２０２４／１２／１５　　礼拝メッセージ　　近藤　崇志　牧師

主　　題：　人の子を仰ぎ見るなら
聖書箇所：ヨハネの福音書　３章９－１５節

私たちはきょう、“人の子イエス・キリストは仰ぎ見る”ことについてヨハネ３：９－１５を中心に考えてみたいと思います。まずはみことばをお読みします。先週学んだ内容を思い返すためにも、いま一度１節から読みますので、よく目を留めてください。

ヨハネ３：１－１５

「:1 さて、パリサイ人の中にニコデモという人がいた。ユダヤ人の指導者であった。:2 この人が、夜、イエスのもとに来て言った。「先生。私たちは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神がともにおられるのでなければ、あなたがなさるこのようなしるしは、だれも行うことができません。」:3 イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」:4 ニコデモは言った。「人は、老年になっていて、どのようにして生まれることができるのですか。もう一度、母の胎に入って生まれることができましょうか。」:5 イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることができません。:6 肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。:7 あなたがたは新しく生まれなければならない、とわたしが言ったことを不思議に思ってはなりません。:8 風はその思いのままに吹き、あなたはその音を聞くが、それがどこから来てどこへ行くかを知らない。御霊によって生まれる者もみな、そのとおりです。」:9 ニコデモは答えて言った。「どうして、そのようなことがありうるのでしょう。」:10 イエスは答えて言われた。「あなたはイスラエルの教師でありながら、こういうことがわからないのですか。:11 まことに、まことに、あなたに告げます。わたしたちは、知っていることを話し、見たことをあかししているのに、あなたがたは、わたしたちのあかしを受け入れません。:12 あなたがたは、わたしが地上のことを話したとき、信じないくらいなら、天上のことを話したとて、どうして信じるでしょう。:13 だれも天に上った者はいません。しかし天から下った者はいます。すなわち人の子です。 :14 モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子もまた上げられなければなりません。:15 それは、信じる者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持つためです。」

●チャールズ・スポルジョンの回心

これまでの教会の歴史において、最も有名な説教者のひとりと言っても過言ではないチャールズ・スポルジョン。そんな彼も幼いころには、自分のうちに見られる罪深さに葛藤を抱き、ひどく苦しんだ人物でした。実際に神様を冒涜するようなことばを口にはしませんでしたが、心のうちでは常に神様や人を呪う悪い考えがあふれ、神様の存在そのものを否定しようとする激しい思いに駆られることもありました。どうしようもない罪悪感を味わう中で、スポルジョンはどうにかして罪の赦し、自分の心の重荷を取り除いてくれるものはないかと、いろいろな教会を訪れていたのです。この時の彼は、救われるためには自分自身が何かを感じたり、何かをしなければならないと思い込んでいました。背中を鞭で打たれたり、困難を伴う巡礼の旅を経験したりした方が良いのではないかとさえ考えていました。

しかし、そんな彼を大きく変える出来事がありました。ある日曜日の朝のこと、教会に向かう途中でスポルジョンは猛烈な吹雪に見舞われます。ふだん通っていた教会に行くのが難しくなった彼は、代わりに見つけた家の近くの教会に入りました。そして、そこで十数人の人とともに礼拝をささげるのです。その日は嵐のために、正規の牧師も来ることができず、説教の時間になると、靴屋か服の仕立て屋を営んでいるかのように見える貧しくやせた男性が講壇に上がりました。そして彼は聖書を開いて、イザヤ４５：２２を読み上げたのです。そこにはこのようなことばが記されていました。**「地の果てのすべての者よ。わ**

たしを仰ぎ見て救われよ。わたしが神である。ほかにはいない。」と。また、この男性は１０分ほど話をした後で、講壇からスポルジョンを見つめてこう言いました。「若者よ、あなたはとてもみじめに見えます。きょうのみことばに従わなければ、今も後もいつまでもあなたはみじめなままです。しかし従うのであれば、その瞬間救われるでしょう。若者よ、イエス・キリストを仰ぎ見なさい、見なさい、見なさい、見なさい。見て生きることのほかに、あなたになせることは何もないのです」と。スポルジョンは自分にだけ語られたことに腹を立てていたでしょうか？いいえ、彼はその時初めて救いの道を見出すことができました。自分自身のどんな努力も、どんな経験も、どんな良い行いも何もなく、ただイエス・キリストを見上げ、信じることを通してのみ救われるのだと知ったのです。

ここで改めて、先週学んだことを思い出してみてください。先週、私たちはそれぞれの永遠に、それぞれの救いにかかわる非常に大切な真理を、ニコデモとイエス様との会話の中に見ました。ある日の夜のことでした。イエス様のもとにニコデモがやって来たのです。ニコデモは、人の目から見れば、最高の候補者でした。考え得る限り、最も救いに近いと思える人物でした。献身的で、宗教にも厚く、神様を喜ばせるためであれば、どんな命令にも従順であろうとし、道徳的にも周りから非難されるようなところもなければ、富や権力も持っていたし、民の間でたたえられ、尊敬されるような存在でした。聖書の知恵や知識、理解においてもほかに並ぶ者はなく、人々からいつも頼りにされるような人望の厚いすばらしい教師だったのです。もしこのような人が救われない、このような人が神の国に入ることができないと言うのであれば、ほかの人はもう言うまでもありませんと言えるような非の打ち所のない人物でした。

しかし、そんな彼に向かって、イエス様ははっきりと告げられたのです。ニコデモ、「**人は、新しく生まれなければ**」、「**水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることができません**」と。宗教的な熱心さも道徳的な正しさも永遠のいのちをもたらすことはありませんでした。人はどれだけ知識を蓄えて、どれだけ自分の態度やふるまいをきれいに整えていたとしても、神の子どもとなることは不可能だったのです。生まれながらに罪に汚れている私たちに、まず必要だったのは外側の聖さではなく内側が洗われ、新しくされることでした。常に死んでいた私たちに、まず必要だったのは表面上の取り繕いではなく、心に新しいいのちが与えられることでした。私たち自身が自分の救いにおいて、何かできたことはありませんでした。すべてにおいて、罪に堕落したひとりひとりには、文字どおり神様のあわれみが人のうちを新しく生まれ変わらせて、新してくれる、更新してくれる奇跡が必要だったのです。テトス３：５でも「**神は、私たちが行った義のわざによってではなく、ご自分のあわれみのゆえに、聖霊による、新生と更新との洗いをもって私たちを救ってくださいました。**」と言われていました。死んでいた私たちのうちに神様が働いてくださったのだとすれば、私たちが誇ることは何もありません。ただ、一方的な神様の恵みの賜物、恵みのギフトでしかなかったのです。Ｒ・Ｃ・スプロールという先生も、こんなふうに述べています。「もし今日、あなたの心の中に少しでもキリストに対する愛情があるなら、それは神である聖霊が、その優しさ、力、憐み、恵みによって、あなたの魂の墓地を訪れ、あなたを死からよみがえらせてくださったからです。」と。

○人の子に対する二つの応答：

こんな大切な教えを、ニコデモはイエス様から聞きました。ではこの主のことばに、彼はどのように応答したのでしょう？その応答の内容を私たちはきょうみことばから一緒に考えてみたいと思います。特に９節のところから続くニコデモとイエス様とのやり取りを見ていけば、そこにイエス様――人の子に対する人々の応答を二つ見て取ることができます。私たちひとりひとりも、どちらかの応答をしています。ですから、自分自身のこととして一緒に考えてみましょう。

１．人の子を拒絶すること　９－１２節

きょうのみことばに戻っていただいて、まず一つ目の応答が９－１２節に書かれていました。それは人の子を拒絶することです。９－１０節には「**:9 ニコデモは答えて言った。「どうして、そのようなことがあ**

りうるのでしょう。」:10 イエスは答えて言われた。「あなたはイスラエルの教師でありながら、こういうことがわからないのですか。」と記されていました。新しく生まれるということ――「**新生**」に関するイエス様のことばを今耳にしたニコデモは、大きな混乱を覚えていました。言われていることの意味を理解できていませんでした。少し彼の立場に立って考えてみてください。ニコデモは、幼いころから律法を忠実に守り続けてきました。神様の命令に熱心に従って、献身的に喜んでいろいろなものを犠牲にしながら生きてきたのです。また、それは自分だけの話でもありませんでした。彼は教師として、神の国に入るためには神様を愛して、そして神様の律法をすべて守り行わなければならないと人々に教え続けてきた存在だったのです。そして、そんな彼がこれまで一生懸命に積み重ねてきたもの、救いに至ることができると信じてきたそのすべてが否定され、そして跡形もなく崩れ去ったのです。ある意味、衝撃を覚えたのは当然の応答だったでしょう。

でもここに大きな問題がありました。イエス様は混乱を覚える彼に向かって、１０節で「**あなたはイスラエルの教師でありながら、こういうことがわからないのですか**」と言っていました。先週も言いましたけれども、この「**イスラエルの教師**」の「**教師**」ということばの前には、特定のものを表す定冠詞、英語で言う“the”がついていました。要するにニコデモというのは、単なるイスラエルの一教師ではなくて、“the教師”でした。教師の中の教師と呼ばれる立場にいた者だったのです。彼ほど旧約の知識を持っている人はいませんでした。ほかの教師が律法について何か疑問を覚えたとすれば、真っ先に頼りにするのがこの人物でした。それほどまでに彼は旧約の理解に富んでいたはずの人物でした。だから本来であれば、旧約の中でも教えられてきたその「**新生**」ということについて、神様の救いのご計画というものに関して、ニコデモこそ知っていて当たり前の存在でした。新しく生まれ変わるということは、新しく教えられたことではありません。旧約の中で教えられてきたことでした。だからこそニコデモは知っていて当然だったのです。先週見ましたけれども、神様がエゼキエル３６章のところで「**:25 わたしがきよい水をあなたがたの上に振りかけるそのとき、あなたがたはすべての汚れからきよめられる。わたしはすべての偶像の汚れからあなたがたをきよめ、:26 あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。**」と。ニコデモがこのことばを知らないわけはありませんでした。知識として彼はそのことを覚えてもいたでしょう。でもそれを彼は何も理解していなかったのです。最も知識を持っていた人が、救いにおいて最も基本的なことをわかっていませんでした。どれだけ聖書や律法をよく知っている専門家であろうとも、知識自体がその人に救いをもたらすことは絶対にないということです。

▶**「わたしたちは……わたしたちの……」　１１節**

でも、皆さんに気づいてほしいのは、これは単なる知的な問題にとどまるものではないということです。ニコデモの持っていた問題は、知的なところではありませんでした。それ以上に深刻な問題を抱えていました。イエス様が発した次のことばをよく見てください。人のうちにあるものをすべてご存じだったイエス様は、ニコデモの心のうちにあるものを、いや主を知らないすべての心のうちにあるものを見抜いていました。何が真の問題なのかということを知っていました。だから、こんなことばが投げかけられていたのです。１１節「**:11 まことに、まことに、あなたに告げます。わたしたちは、知っていることを話し、見たことをあかししているのに、あなたがたは、わたしたちのあかしを受け入れません。**」と。イエス様はここで「**わたしたち**」という複数形の主語を用いていました。いったいだれのことを指しているのだろうかと思った人もあるかもしれません。実を言うと、この「**わたしたち**」がだれを指しているのかということについては議論がなされています。たとえば、ある人たちは、これはイエス様が自分の弟子たちのことを含めてしゃべっているのではないかと考えています。バプテスマのヨハネのこと、ペテロやアンデレ、そういった者たちのことを含めて、この時イエス様のあかしを立てていたものたちのことを指していたのではないかと考えられてもいます。また、ある人たちは、これをニコデモのことばに対比したものではなか

ったのかと考えています。３：２に戻って、夜、イエス様のもとにやって来たニコデモは「**先生。私たちは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。**」と言っていました。「**私たちは、……知っています**」と。だからこそ、これに対してイエス様は、「あなたがたは何も知りません。わたしたちこそが知っている。わたしたちはわたしたちが知っていることを話しているのだ」と、強調するために「**わたしたち**」ということばを使っていたのではないかと考えている人もいます。また、ある人たちはイエス様ご自身が三位一体の神様としてのあかしをここで立てているのではないかと考えています。

いろいろな考えがありますが、いずれにせよ重要なポイントは同じでした。ここでイエス様は揺るがないあかし、真理を語っていました。それにもかかわらず、ニコデモはそれを受け入れようとしませんでした。結局のところ、知識や理解の問題ではありません。彼のうちにあった人の子やそのことばを拒絶する、そのかたくなな心、それが最大の問題だったのです。すごく大切なことです。たとえば皆さんのもとにだれかがやって来て、もしくは自分自身が頭の中で、かたくなに逆らう最悪の罪人とはどんな人ですかと聞かれたら、私たちはどんな人を思い浮かべるでしょう？もしかしたら神様に憎しみや敵意をあらわにして、悪に悪を重ねているような人の姿を思い浮かべるかもしれません。確かにこの当時にもイエス様のことをひどく忌み嫌い、この方の言うことを聞き入れようともせず、激しく迫害し、最後には十字架につけたような、パリサイ人もたくさんいました。でもそれだけが、神様にかたくなに逆らう最悪の罪人なのではありません。ニコデモのようにイエス様に関心や興味を示し、宗教に熱心で周りから尊敬されるような生き方をしている者も、みんな同じでした。どれだけ聖書の知識にあふれていようとも、どれだけ外側をうまく取り繕っていたとしても、もしその人が心から主を求めず、主に服従していないのであれば、そのような人はみな神様を心から忌み嫌い、心から激しく憎み、拒絶している者にすぎない罪人なのだと聖書は教えています。勘違いしてはいけないことは、私たちはだれひとりとして、中立の立場にいるのではないということです。神様の敵になろうか、神様の仲間になろうか、真ん中に立ってそんなことを自分で選ぼうとしているのではありません。生まれながらの私たちはみんな神様に逆らう敵でしかありませんでした。今あなたは無関心かもしれません。でもその無関心さは神様を忌み嫌っている、憎しみを持っている心の現れなのです。自分の肉の欲の中に生き、自分の欲に従って生きている、私たちはそんなただ主を激しく憎む者たちだったのです。

みことばはこんなふうにも言っています。ローマ８：７－８に「**:7 というのは、肉の思いは神に対して反抗するものだからです。それは神の律法に服従しません。いや、服従できないのです。:8 肉にある者は神を喜ばせることができません。**」とありました。コロサイ１：２１にも「**あなたがたも、かつては神を離れ、心において敵となって、悪い行いの中にあったのですが、**」と書いていました。私たちは、かつて神様を離れて心において中立の立場を取っていたのではありません。みんな敵でした。いっさい神様を喜ばせようともせず、自分勝手に歩み続けていた私たちは、当然神様の正しい御怒り、永遠のさばきに値するだけの者だったのです。エペソ２：３でもこう言われていました。「**私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。**」と。認めたくないかもしれません。でもこれが、聖書が描いていた私たちの姿でした。だからこそ、救いには私たちの努力や私たちの良い行ないが必要だったのではありません。私たちの救いにはただただ新しくされる必要がありました。私たちが神様とともに歩んでいくためには、私たちは新しく造り変えられる必要があったのです。どれだけ教会に熱心に通おうが、どれだけ教会で育とうが、どれだけ聖書の知識を身につけようが、どれだけ周りの人に尊敬され、称賛されるような歩みをしようが、それらにはその人を救う力など一つもありません。人間的に考えてみれば、ここにいる私たちのだれよりもすぐれたニコデモという人物は、最高の候補者でした。だれがどこから見てもすばらしい人物でした。でもそんな彼の心も罪に汚れて、霊的に盲目で、かたくなに神様を拒絶する者だったのです。

果たして私も、皆さんひとりひとりも、今何を心で求めているでしょう？神様によって新しくされることを心から願っているでしょうか？イエス様を信じて、自分のすべてをゆだねて、主とそのことばに喜んで従順に従っていきたいと望んでいるでしょうか？それともいつまでもイエス様を拒んで、自分には何の問題もないと思い込んで、逆らい続けていないでしょうか？口では言わずとも、まるで自分自身のうちには自分自身のことを救う術があるかのようにふるまい、主のあわれみに助けを求めることをかたくなに拒絶していないでしょうか？ニコデモは最初、自分の状態に気づいていませんでした。宗教的に熱心だった彼は、道徳的に正しかった彼は、それらが神様に結びつく手段だと信じて疑いもしませんでした。良い行いをして、良い歩みをしている自分が、救いを必要とする罪人だということを思いもしませんでした。でも、それが大きく違っていたのです。人の心のうちを見られる神様の前ではすべてが明らかでした。イエス様はニコデモにこう言いました。続く１２節に「**あなたがたは、わたしが地上のことを話したとき、信じないくらいなら、天上のことを話したとて、どうして信じるでしょう。**」と書いています。ニコデモは「**地上のこと**」、簡潔に言うのであれば、今イエス様が話した内容――御霊によって新しく生まれるという、救いの最も根本的な、救いの最も初歩的な教え、それすら彼はわかっていませんでした。信じていませんでした。彼は確かに教師としては正しい知識をたくさん持っていました。でもその心がかたくなであったからこそ、神の国に入るのに最も重要な教えを拒み、自分のこととして信じていなかったのです。これが罪に汚れている心の現れでした。光が世に来ているにもかかわらず、光よりもやみを愛する、人の堕落した性質の現れでした。たとえはっきりと真理が示されていたとしても、それに聞き従いたいと思わず、救い与えてくれる人の子を拒絶するのです。

２．人の子を信じること　１３－１５節

間違いなく罪に汚れ、死んでいた私たちにはこの問題を自分でどうすることもできませんでした。ニコデモもこの話を聞いて絶望を覚えたでしょう。でも、そのような絶望の中に、あわれみ深い主が次の応答を与えられるのです。イエス様がどんな応答を示されていたかと言うと、１３－１５節のところに出てきます。二つ目の応答は、人の子を信じることでした。ご自身、もともと天におられ、天から下って来られた神の御子イエス様は、人には何もできないことに関して語られていくのです。みことばをよく見てください。１３－１４節にこのように続いています。「**:13 だれも天に上った者はいません。しかし天から下った者はいます。すなわち人の子です。:14 モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子もまた上げられなければなりません。**」と。

さて、突然、モーセが荒野で蛇を上げたことに触れられていました。イエス様はいったい何を言わんとしたのでしょう？そのことを理解するために、この出来事が実際に起こった場面を詳しく見てみましょう。民数記２１：４－９を開いてみてください。順に説明を入れながら見ていきたいと思います。ちなみにこの話をニコデモはだれよりもよくわかっていました。おそらく彼は、この物語の全容を暗記すらしていたでしょう。イエス様はそんな彼によくわかるように、かつての出来事をたとえに用いて教えようとされました。まず４－５節に「**:4 彼らはホル山から、エドムの地を迂回して、葦の海の道に旅立った。しかし民は、途中でがまんができなくなり、:5 民は神とモーセに逆らって言った。「なぜ、あなたがたは私たちをエジプトから連れ上って、この荒野で死なせようとするのか。パンもなく、水もない。私たちはこのみじめな食物に飽き飽きした。」**」と書かれています。エジプトの地で奴隷になっていたイスラエルの民たちは、神様によって助け出されました。そして、まさに今、約束の地に向かっている途中にあったのです。最初から彼らのことを深くあわれまれた神様は、道中、彼らのことを常に導いて食べ物など必要な物を与え、満たしておられたのです。しかし、そんな神様に対して、民は不満を抱きました。彼らは多くの恵みを受けていたにもかかわらず、ブツブツ呟き、そして神様に対して罪を犯したのです。その結果、どうなったのか続きにこう書いていました。６節「**そこで【主】は民の中に燃える蛇を送られたので、蛇は民にかみつき、イスラエルの多くの人々が死んだ。**」と。罪を犯した結果どうなりました？神様はそんな強情な民を厳しくさばかれて

いました。蛇を送って、その蛇にかまれた者たちは大勢死んでいったのです。そして、イスラエルの民たちはこのさばきをとめる術を持っていませんでした。文字どおり死に行く彼らには自分たちが助かるためにできることは何もありませんでした。無力な彼らにはただあわれみを求めることしかできなかったのです。何よりも救いというものを必要としていたのです。

その後、彼らはどうなったのか、７－９節にこう書いています。「**:7 民はモーセのところに来て言った。「私たちは【主】とあなたを非難して罪を犯しました。どうか、蛇を私たちから取り去ってくださるよう、【主】に祈ってください。」モーセは民のために祈った。:8 すると、【主】はモーセに仰せられた。「あなたは燃える蛇を作り、それを旗ざおの上につけよ。すべてかまれた者は、それを仰ぎ見れば、生きる。」:9 モーセは一つの青銅の蛇を作り、それを旗ざおの上につけた。もし蛇が人をかんでも、その者が青銅の蛇を仰ぎ見ると、生きた。**」と。民は罪を犯しました。当然、神様の正しいさばきがそれに値する者たちの上に下りました。彼らのうちには自分たちを救う手段は何もありませんでした。だからこそ神様が働かれたのです。神様ご自身が救いの道を備えられました。神様ご自身がモーセに青銅の蛇を作らせ、上に上げたその蛇を見た者にいのちを与えられました。自分たちの罪深さを認めて、助けてくださいと心からあわれみを乞うすべての者をあわれみをもって見捨てず、ご自身の愛を示されたのです。「**蛇が人をかんでも、その者が青銅の蛇を仰ぎ見ると、生きた**」、それこそが恵み深い神様が一方的に示された唯一の救いの手段だったと言うのです。

そしてこの背景を覚えた上で、もう一度ヨハネに戻っていただくと、ヨハネ３：１４でイエス様ご自身がこのように言われていました。「**モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子もまた上げられなければなりません。**」と。興味深いのは、ここで使われていた「**上げられ**」るという表現は、この福音書の中でここを除いてあと３回登場し、そのすべての部分でイエス様の十字架を表していました。レジメに箇所を記しておきましたが、１カ所だけ８：２６を８：２８に訂正してください。たとえばヨハネ１２：３２－３３を見てみると、「**:32 わたしが地上から上げられるなら、わたしはすべての人を自分のところに引き寄せます。」:33 イエスは自分がどのような死に方で死ぬかを示して、このことを言われたのである。**」と。イエス様が言わんとしていたことは明白でした。かつて罪を犯したイスラエルの民、彼らは上げられた青銅の蛇を仰ぎ見て救われました。そして、それと同じように、すべての罪人はただ十字架に上げられる人の子を仰ぎ見て救われるということです。救いの道は私たち自身のうちにはありませんでした。救いの道は、愛によって神様が備えてくださったその方のうちにあるということです。ただ、イエス・キリストこそ無力な罪人が救いへと至ることのできる唯一の道でした。上げられたイエス・キリストを信じる、その信仰こそ罪の中に死んでいた人にいのちを与えることのできる唯一の手段だったのです。

３章に戻って、イエス様はニコデモとの会話をこう締めくくっていました。３：１５に「**それは、信じる者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持つためです。**」と書いています。それぞれ自分のこととして考えてみてください。もしも仮に、私たちひとりひとりが過去に戻ったとして、私たち自身がイスラエルの民が経験していたのと同じ状況に置かれたとしたらどうするでしょう？神様のさばきが下り、蛇に自分がかまれ、自分が死ぬことをわかっていたとすれば、私たちならどのように行動するでしょう？神様の前に犯した自分自身の罪を心から認めて、神様のあわれみを求め、そして神様が備えてくださった青銅の蛇をただ素直に仰ぎ見ようとするでしょうか？それとも自分自身でどうにかしようと、必死になるでしょうか？何とか自分で毒を取り除いて、何とか自分でその部分を消毒しようとするでしょうか？医者を呼んできたり、ほかのだれかに助けを求めたり、もしくは自然に毒が消えてなくなっていくことを願って、ただひたすらに待ち続けるでしょうか？また、青銅の蛇を見て救われるというその単純なことに対して疑いや疑念を抱いて、それをただ見上げるということをいつまでも拒むでしょうか？ある人は言うかもしれません。そんなことするはずないでしょ？毒におかされていると自分が知ったのであれば、すぐに蛇を見みます、唯一の救いの手段に自分の身をゆだねます、でも、それこそがイエス様がここですべての人に対して求めていることだったのです。私たちはみんな罪人でした。罪の毒におかされ死んだ

者でした。私たちのうちにはひとりとして、自分の救いのために何かできた者はいなかったのです。そして、もしそんな私たちが自分で自分を救うことができると考え続けているのであれば、もしそんな私たちが罪に対して無関心で、何もせずそのまま放置し続けているのであれば、それで問題ないと考えているのであれば、それほど悲しく、それほど愚かなことはないということです。

救いを与えることのできる唯一の道をみずから拒んでいるのであれば、それほど悲惨なことはないということです。私たちはみんな罪人として生まれました。罪を犯すから罪人になったわけではありません。私たちはみんな罪人として生まれました。そんな罪人として生まれた無力な私たちにできたことは、ただ主のあわれみを求めることしかありませんでした。自分で自分を新しく生まれ変わらせることのできない私たちには、神様が備えてくださった救い――上げられた人の子を心から信じることだけ、それしかできませんでした。人の努力や良い行いも何の役にも立ちません。多くの知識も、正しい行いも何の力にもなりません。でもどれほど罪の毒にひどくおかされていたとしても、どれほど私たちが罪深い者であったとしても、あわれみ深い神様、イエス様にはその人を十分に癒す力があったのです。罪がある、そこには神様の恵みがありました。そして、その真理をニコデモは素直に仰ぎ見なければならなかったのです。

今の私たちも同じです。果たしてあなたは今、この救い主を素直に仰ぎ見て、心から信じる者として生きているでしょうか？この人の子こそ、唯一の救いの道なのだと信頼し、自分のすべてをゆだねて、この方に喜んで従っていこうと歩んでいるでしょうか？それともいまだに神様に対して無関心で、自分の罪は何の問題もないと、その心で神様を憎み、救い主として来られたイエス・キリストを認めずに拒み続けているでしょうか？もしまだこの中に拒絶している方がおられるのであれば、どうか今、神様のあわれみを求めてください。罪の問題をそのままにしておかないでください。神様が働いてくださって、神様に逆らっている自分自身の罪深さが、もし今示されているのであれば、それを素直に認めて、それを心から悔い改めて御子イエス・キリストを自分の救い主として、主として信じてください。あなたにとって何よりも必要な救い、新しいいのちというものは、あなたのうちにもなければ、ほかの何かにもありません。ただ上げられた人の子のうちにのみあります。だからその方を仰ぎ見てください。その最高のお方を今、心から信じてください。

また、既にこの方を信じておられるという皆さん、私たちは自分がどのようにして救われたのかということを絶対に忘れてはいません。私たち救われた後もさまざまな場面で、持っていた救いの喜び、それとは別のものに心を奪われてしまって、いろいろなことに対して不満や憤りを覚えることがあります。日々起こるいろいろな出来事を通して、私たちは神様に疑いを抱いたり、不平を口にすることもあります。かつてのイスラエルの民たちのように、主がともにいて、恵みによって日々私たちは必要が与えられているにもかかわらず、どういうわけか、私たちは神様が今の私に本当に必要なものが何なのかわかっていない、自分には必要なものが与えられていないとつぶやいてしまったり、神様にゆだねなくても私は自分の日々の課題も、罪の問題も自分の力や考えだけでどうにか解決することができると、そうやって自分よがりになって歩んでいることもあるのです。でも、それは大きな間違いでした。それは私たちが持っている大きなプライドの罪でした。

来週、クリスマスの礼拝の時に、一緒に考えたいと思いますけれども、３：１５の次の箇所、１６節を見てください。これほど私たちがよく知っているみことばはないかもしれませんけれども、こう書いていました。「**神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。**」と。この箇所を見る時、私たちは文脈というものを忘れてはいけません。みことばは救いに関して、何か自分自身で貢献できるものがあったと教えようとしているのではありません。神様の愛、与えられたひとり子こそ、私たちにとってすべてでした。罪に汚れた私たちが自分の知恵や力で罪深さというものを洗い流すことはできませんでした。熱心な行い

が新しいいのちをもたらすこともできませんでした。私たちはみんな無力だったのです。でもそんな私たちのために神様が救いの道を備えてくださいました。神様がご自身の愛によって御子を与えてくださったのです。だから私たちはクリスマスを心から喜びます。私たちに唯一の救いの道を与えてくださった神様を、私たちの罪のために上に上げられてくださったそのお方を、私たちは心から喜びます。そしてその方を日々覚えて感謝を持って歩んでいこうとするのです。私たちにはできないことすべてをなしてくださったその神様のあわれみを、いつも心から信じ、それに助けを求め、そしてそれにすべてをゆだねて歩んでいこうとするのです。どんな時も変わらずに上げられたイエス様を仰ぎ見ながら、感謝しながら従っていこうとするのです。神様がなしてくださったことは、私たちの理解には到底及びません。でも私たちがいつも十字架を覚える時に、私たちはそこに救いがあることを見ます。私たちはいつもそこに感謝することのできる理由を持っています。

　最初に見たスポルジョンも同じでした。キリストをただ仰ぎ見ること、キリストを信じることによって救われると。その喜びを知った彼はその喜びとともに歩み続けました。その喜びとともに主に仕え続けていました。そして、そんな彼がこんなことばも残していました。最後にそれを見て終わりにしたいと思いますけれども、自分のこととしてよく考えてください。「したがって、覚えておきなさい。あなたを救うのはキリストを掴むあなたの力ではなく、キリストです。あなたを救うのはキリストにあるあなたの喜びではなく、キリストです。キリストへの信仰でさえ、それが手段ではあっても、救うのはキリストの血と功績なのです。ですから、キリストを掴むあなたの手ではなく、キリストに目を向けていなさい。あなたの希望ではなく、その希望の源であるイエスに目を向けていなさい。あなたの信仰ではなく、その信仰の創始者であり完成者であるイエスに目を向けていなさい。自分たちの祈りや行い、感情を見つめてもそこに幸いを見いだすことはできません。魂に安らぎを与えるのは、私たちが何者であるかではなく、イエスが何者であるかです。もし私たちがサタンに打ち勝ち、神との平和を得たいと望むのなら、『イエスを仰ぎ見る』ことによってのみ可能なのです。ただひたすら主に目を向け続けていなさい。彼の死、苦しみ、功績、栄光、とりなしを絶えず心に留めておきなさい。朝目覚めたときにはイエスを見つめ、夜寝るときにも見つめていなさい。……熱心に従い続けなさい。そうすれば決してイエスはあなたを見捨てることはありません。」